

令和 3 年 4 月 18 日現在

機関番号：11201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02582

研究課題名(和文) コンピエーニュ・カルメル会殉教修道女の表象に関する研究

研究課題名(英文) A Study on Representations of the Sixteen Carmelites of Compiègne

研究代表者

中里 まき子 (NAKAZATO, Makiko)

岩手大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：40455754

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：フランス革命期の反カトリック政策に抗って信仰を貫いたため、1794年にギロチンにかけられた16人のコンピエーニュ・カルメル会修道女が、現代までどのように表象されてきたかを探るべく、文献史料(偶然に逮捕と処刑を免れたカルメル会修道女が書き残した手記等)と文学作品(ジョルジュ・ベルナノスの映画脚本『カルメル会修道女の対話』等)を検討した。続いて、修道女たちの表象に、フランスの社会状況と人々の心性が映し出されていることを論証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

革命期のみならず、革命後のフランス社会にも見られた革命側(主に共和派)と旧体制側(主にカトリック・王党派)の対立構造は、革命の記憶の継承を分裂させることとなった。本研究の意義は、この分断を踏み越えて、革命の記憶の継承を俯瞰的視野から検討したことである。その結果、「共和国の歴史」と同様、「カトリックの歴史」もまた、客観的で中立なものではないことを確認し、さらに、革命の経験と「自己」のエクリチュールの生成との相関を考察する際に、今まであまり光が当たらなかった旧体制側による証言テキストを考慮に入れることの重要性を示すことができた。

研究成果の概要(英文)：In order to show how the Sixteen Carmelites of Compiègne, arrested and guillotined during the French Revolution, have been represented, we read both historical documents like the notes written by one of the Carmelites of Compiègne, who accidentally escaped from the arrest and the execution, and literary works like "Dialogues of the Carmelites" by Georges Bernanos. We also proved that their representation varied according to social situation and human mentality of each time.

研究分野：フランス文学

キーワード：フランス革命 カルメル会 記憶 証言 喪のエクリチュール 殉教

1. 研究開始当初の背景

(1) コンピエーニュ・カルメル会の16人の修道女は、フランス革命期の反カトリック政策に抗って信仰を貫いたため逮捕され、1794年7月に処刑された。この出来事が後世に伝えられたのは、偶然、逮捕と処刑を免れた受肉のマリー修道女(Sœur Marie de l'Incarnation)が、1830年代に亡き同志たちの生前の言行と処刑時の模様を書き記し、彼女の死後、それが出版されたためである。16殉教修道女の存在は、特にプーランクのオペラ『カルメル会修道女の対話』(1957年初演)の題材として広く知られるようになった。しかし、オペラの元となった文学作品の創作や、革命期から現代まで史実が継承されてきた経緯などについて、総合的な研究は試みられていなかった。

(2) フランス革命の記憶の継承は、革命側(主に共和派)と反革命側(主にカトリック=王党派)とで分断される傾向がある。カルメル会の16修道女の殉教という史実は「カトリックの歴史」として語り継がれてきたが、フランス共和国の確立期である第三共和政期(1870~1940年)に形成された「共和国の歴史」からは排除され、長らく本格的な研究の対象とはならなかった。しかし、20世紀半ばに、彼女たちに関する文学作品が注目を集めたことを契機として、マリー修道女の手記等の史料が編纂・刊行された(Bruno de Jésus-Marie, *Le Sang du Carmel*, Cerf, 1954)。また、それ以降、ベルナノス等による創作についても複数の研究論文が発表された。

2. 研究の目的

(1) カルメル会殉教修道女たちに関する文献史料と文学作品の双方を検討することにより、彼女たちの表象の変遷を辿り、そこに映し出されるフランスの社会状況と人々の心性を読み取ることを試みる。その際、史実の継承において文学的要素が果たす役割についても明確化を図る。

(2) 革命期のみならず、革命後のフランス社会にも見られた革命側(主に共和派)と反革命側(主にカトリック=王党派)の対立構造は、革命の記憶の継承を分裂させることとなった。本研究では、この分断を踏み越えて、カルメル会殉教修道女の記憶がいかに継承されたかを俯瞰的視野から明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 16殉教修道女の表象と社会状況との相関を明らかにするために、文献史料としては、マリー修道女の手記や、1906年に彼女たちが列福された際に刊行された書籍、そして文学作品としては、ドイツのカトリック作家ゲルトルト・フォン・ル・フォールの『断頭台の最後の女』や、ジョルジュ・ベルナノスが『断頭台の最後の女』を映画化するために執筆した脚本『カルメル会修道女の対話』を検討する。

(2) 16殉教修道女の記憶を伝えるマリー修道女のエクリチュールにおける文学的要素や語りの特徴を明確にするため、他の書き手による革命の証言テキストや、共和派の歴史家ジュール・ミシュレによるジャンヌ・ダルクの伝記(『フランス史』第5巻、1841年)との比較を行う。

(3) 研究協力者エリック・ブノワ教授(ボルドー・モンテーニュ大学)と連携して国際研究集会を開催し、歴史的事件に関する「証言」の問題を検討する。

4. 研究成果

(1) ミシュレなどの共和国の歴史家たちは、革命期のカトリック殉教者に目を向けることはなかった。一方、恐怖政治の生き残りであるマリー修道女は、16人の修道女の理想化された姿を書き残した。そして、20世紀初頭のエミール・コンブ内閣の抑圧を生きるヴィクトール・ピエールなどのカトリック信者は、革命期の殉教者たちを抵抗のシンボルとした。「共和国の歴史」と同様、「カトリックの歴史」もまた、客観的で中立なものではない。そのことを、マリー修道女が同志たちの処刑の場面をより劇的なものとするべく改稿していった手法の分析から論証した。

(2) 20世紀の世界大戦が、カルメル会殉教修道女の表象に転換をもたらしたことを確認した。まず、ル・フォールの中編小説『断頭台の最後の女』(1931年)のヒロインで、コンピエーニュ・カルメル会の見習い修練女である架空の人物ブランシュ・ド・ラ・フォルスが、臆病な性格とされ、列福期までの理想化されたカルメル会修道女の姿と大きく異なっていることは、本作の背景にある社会状況が、もはやカトリックと共和派との対立ではなく、ナチスの台頭であることと連

動している。また、第二次世界大戦後にジョルジュ・ベルナノスが『断頭台の最後の女』を映画化するために執筆した脚本『カルメル会修道女の対話』において、世の中に蓄積した悪のせいで命を落とすカルメル会修道女たちは、世界大戦の無辜の犠牲者たちを象徴すると考えることができる。

(3) フランス革命を、「自己」のエクリチュールを発展させた契機と捉えることができる。ペアトリス・ディディエは、革命期に個人的著述が量産されたことの要因として、ルソーの自伝『告白』の影響、革命期の人々の歴史に参与している意識、そして、失われたカトリック信仰の代替物が求められたことを挙げている。しかしこうした見方は、主として、ロラン夫人のような革命を推進する側にあった人物のテキストに着目した場合に導き出されるものである。本研究では、あまり光が当たらない旧体制側による革命の証言として、マリー修道女の手記を取り上げ、下記の諸側面を検討した結果、ディディエの見方には再考の余地があると考えに至った。

マリー修道女は、殉教した修道女たちの生前の言動を記述する際に、書き手としても行為者としても、できるだけ自分を登場させないよう自己規制している。例えば、修道院からの強制退去後にリドワーヌ院長と共に住んだ4人の修道女の名を挙げる際、自分もそのひとりであったにもかかわらず、あえて名を伏せ「もうひとりの修道女」とした。また、パリでリドワーヌ院長と共に、刑場に連行される聖職者たちを目撃した場面については、第1稿では自分を「ある修道女」としたが、第2稿では一人称「私」に変えて臨場感を増し、第3稿では一人称の語りを維持しつつも主観的表現を排した記述としている。受肉のマリー修道女の手記は自伝ではないものの、「私」の然るべき位置を模索しつつ書かれたという意味で、「自己」のエクリチュールのひとつの形である。

マリー修道女の手記に含まれる史実に反する記述もまた、暗示的に、彼女の自我の存在を指し示している。史実に対して最も明確に異なっているのは、「自由と平等」の宣誓に関する記述である。実際には、修道女たちは自らの判断で宣誓したにもかかわらず、マリー修道女の手記では、教会の意向に反して修道女たちがこの宣誓を行ったのはコンピエーニュ市長に騙されたためとされている。こうした史実を歪めた記述には、現実を受け入れることのできない書き手の心の声が見え出されている。

マリー修道女による16修道女の処刑の場面と、ジュール・ミシュレによるジャンヌ・ダルクの処刑の場面を比較することにより、2人の書き手が、歴史的人物をヒロイン化するために紡ぎ出した文章の類似性が浮き彫りとなった。マリー修道女とミシュレは革命後のフランス社会において対立し合う陣営カトリックと共和派に属していたが、同時代に執筆した彼らは似通ったヒロイン化の手法を用いており、メンタリティには共通する部分もあったことがうかがえる。マリー修道女のテキストは、書かれた内容とは別にそのエクリチュールの特徴によって、彼女を、19世紀半ばという時代の書き手として提示している。

マリー修道女の手記を、他の書き手による革命の証言テキストと共に検討したところ、書き手自身の死の意識と、亡き人の生きた証を残し、後世に伝えようという意志との間に相関関係が見られた。

(4) 歴史的出来事の「証言」をめぐる近年の考察の多くは、20世紀の証言を対象としている。例えばアネット・ヴィヴィオルカは『証言者の時代』(2013年)において、第二次世界大戦期のユダヤ人虐殺が、長期にわたって膨大な証言を生み出している点で、他の歴史上の出来事を超絶していると指摘する。一方で、19世紀以前の証言が考察の対象とされることは少ない。実際にはそれぞれに膨大な証言を誘発したフランス革命と世界大戦が、証言の研究において分離されている理由として、研究の縦割り構造や、1914年頃の社会構造の転換に加えて、証言というものの性質を挙げることができる。ロラン夫人獄中記やマルグリット・デュラス『苦悩』(1985年)に見られるように、大規模なトラウマ的出来事に遭遇した人はそれぞれに、その経験を前代未聞のものであると感じて、そう表現する傾向がある。しかし実際には、19世紀以前の証言と20世紀の証言とを対比させて読むことは可能であるし、そういった対比的な読解を通して、20世紀の特異性を改めて認識することができるだろう。こうした問題意識から、研究協力者エリック・ブノワ教授(ボルドー・モンテーニュ大学)と連携して国際シンポジウム「証言の時代とそれ以前」を開催したところ、証言をより広い視野から俯瞰し、そこに人間の心性の推移や、時代を超えた普遍性を読み取るという新たな課題が浮上した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 中里まき子	4. 巻 12
2. 論文標題 ジロンドの女王・ロラン夫人の証言（シンポジウム「証言の時代とそれ以前」報告）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Nord-Est（日本フランス語フランス文学会東北支部会報）	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 中里まき子	4. 巻 104
2. 論文標題 フランス革命を語る「私」：コンピエーニュ・カルメル会 受肉のマリー修道女のエクリチュール	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Artes Liberales（岩手大学人文社会科学部紀要）	6. 最初と最後の頁 43-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15113/00014867	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 中里まき子	4. 巻 105
2. 論文標題 ロラン夫人獄中記の再読：フランス革命の証言として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Artes Liberales（岩手大学人文社会科学部紀要）	6. 最初と最後の頁 35-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15113/00014931	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 中里まき子	4. 巻 9・10・11
2. 論文標題 コンピエーニュ・カルメル会殉教修道女の表象とフランス社会	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Nord-Est（日本フランス語フランス文学会東北支部会報）	6. 最初と最後の頁 100-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Makiko NAKAZATO	4. 巻 1
2. 論文標題 Les clivages chronologiques dans les recherches sur les temoignages	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Actes du Colloque International : L'ere du temoignage et avant	6. 最初と最後の頁 3-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計3件(うち招待講演 0件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 中里まき子
2. 発表標題 ジロンドの女王・ロラン夫人の証言
3. 学会等名 日本フランス語フランス文学会東北支部大会シンポジウム「証言の時代とそれ以前」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Makiko NAKAZATO
2. 発表標題 Les clivages chronologiques dans les recherches sur les temoignages
3. 学会等名 Colloque International : L'ere du temoignage et avant (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中里まき子
2. 発表標題 コンピエーニュ・カルメル会殉教修道女の表象とフランス社会
3. 学会等名 日本フランス語フランス文学会東北支部大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	ブノワ エリック (BENOIT Eric)	ボルドー・モンテーニュ大学・文学部・教授	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
フランス	ボルドー・モンテーニュ大学		